

100周年記念事業としての ナショナルオープン開催で知名度が向上

鳴尾ゴルフ倶楽部は、2020年に100周年を迎えた歴史的な倶楽部である。

1901年、六甲山にアーサー・グループが造った4ホールは、その2年後に神戸ゴルフ倶楽部として創立し、日本のゴルフの夜明けだった。さらに山頂では、冬場はプレーできないことから、神戸の海岸沿いに横屋ゴルフ・アソシエーション(6ホール)が生まれた。関東では、日本レスクラブ・ゴルフング・アソシエーション(9ホール、2,473ヤード)が横浜の根岸競馬場内にできたのがスタートだった。

1913年には、長崎県に雲仙ゴルフ場が県営で始まり、長崎出島の外国人やインバウンド客主体にリゾート地のパブリックコースとして誕生した。同年、横屋ゴルフ・アソシエーションが閉鎖され、主要なメンバーたちが集まって生まれたのが、1914年の鳴尾ゴルフ・アソシエーションだった。鳴尾のルーツである。

そして1920年に鳴尾ゴルフ倶楽部が創立された。場所は、鳴尾浜(現在の西宮高須町付近)にあった。そこでまた諸事情により移転を余儀なくさせられて、1930年、現在の猪名川コースに移ったのである。親しみを込めて、ゴルファーたちは「浜コース」「山コース」と呼んでいた。それは鳴尾浜のコース

三谷賀一 理事・グリーン委員長



池田吉清 常務理事

が、1939年まで残っていたからで、両コースを往來するゴルファーも多かったという。この鳴尾ゴルフ倶楽部「山コース」は、クレーン3兄弟が設計し、C・Hアリソンが勧告(アドバイス)し、以来90年、ほぼオリジナルのままのレイアウトで、世界ベスト100選にもランクインした時期もある。

鳴尾ゴルフ倶楽部と国内メジャー競技の歴史は、古い。1928年には、日本プロゴルフ選手権が開催され、その後も、現在の猪名川コースに移転してからも、1932年日本プロゴルフ選手権。1936年日本オープンが開催され、宮本留吉が293ストロークで優勝し、1951年の日本オープンでは、孫士鈞(後の小野光一)が優勝している。

翻って、近年では、ナショナルオープンの開催はなかった。しかし、2010年に日本シニアオープンの開催を決定し、さらに10年後の2020年にも、同選手権を開催することになったのである。従って過去の開催例は、歴史が行き過ぎて参考にならなかった。

2010年は、倶楽部の90周年ということもあって受諾したのだと思うけれど、どうも急な展開で話がまとまらなかったらしい。

「当時、JGAでコース選定の変更があって、鳴尾にお声がかかったと聞いています。それが開催年の3年前でしたか……」と光本浩二理事・広報委員長は、語る。

鳴尾でのナショナルオープン開催の大きな課題があった。それは鳴尾特有の高麗グリーンだった。ちょうどその頃、グリーンスピードを速くしたいという倶楽部内の声が上がっていた。

「いまから思えば、ちょうどいいタイミングだったと思います。鳴尾のグリーンスピードが、通常、7~8フィートぐらいで、速くしようと、準備はしていたんです。決定の報せを受けたのも、鹿児島に芝を見に行っている途中でした」と池田常務理事は言う。

「どちらかといえば、旧態依然のグリーン管理だったものを、しっかりとデータを見極め、テストをして、いいグリーンに仕上げることができました」(池田氏)

2010年大会を制したのは、倉本昌弘だった。生憎の雨の中での大会だったが、鳴尾攻略の巧みさが光った勝利と絶賛された。

「我々がシニアオープンに向けて特に手を入れたところは、グリーンですね。コースセッティングなどは、我々も譲れない部分もあったんですけども、当時JGA競技委員長の野村惇さんの指示を受けて、その通りさせていただきました。幸いにも野村さんは宝塚ゴルフ倶楽部所属ですから、鳴尾のこともよく知っていたので、我々が危惧していたようなことはありませんでした」(三谷理事・グリーン委員長)

それから10年を経て2020年。鳴尾は、年間を通して100周年の事業に取り組んでいた。

その一環で、早くから2度目の日本シニアオープンに向けた準備に入ることができたという。細かいことを言えば、ギャラリーの駐車場や導線。券売。宣伝。広告収入……。それらの準備も万端だった。

「前回のときは、当倶楽部でチケットの販売もすべてやらせて頂いたのですが、今回は、社員(メンバーのことを鳴尾では、そう呼ぶ)全員に前もってお願いして(ある程度の一括購入)いました。でも、その他の販売ルートは、新型コロナ感染症の影響によって、ほとんど動けませんでした。一応、ルートは作っておいたのですが」(光本氏)



光本浩二 理事・広報委員長

鳴尾ゴルフ倶楽部は、全員が個人会員で、法人会員は、いない。この伝統は100年間続いている。それだけに、社員と呼ぶメンバーひとりひとりが、家族的な空気をもたらしてくれる。

「オーバーに言えば、メンバーさんが全員チケットを持って(購入して)いますので、みんなが友達や知人をギャラリーとして連れてくると思っていました。駐車場も、そういう感覚(台数確保)でした」(池田氏)

鳴尾は、10年前よりもかなり駐車場を拡げた。それでも自前では足りない判断して、近隣に700台収容できる駐車スペースを確保していた。コース整備も計画的に年々改良し、もちろんグリーンも鳴尾の高麗グリーンは、スムーズで速いという評判を得ることになった。

「10年前は10月下旬の開催で、今回は9月中旬の開催でしたから、特に高麗グリーンにとっては10月中旬あたりからすごく難しくなるんですよ。グリーンは速さはもちろん自然に出ますし、アプローチが止まりにくいほど。そうなるには9月中旬開催だと少しきついかかと。今年は9月に入りまして割と雨が多かった、ですからコンパクションが数字よりも高く感じるというのが出来なかったのが残念でした。やっぱり止まらない面白さとかその辺が出たほうが良かった。グリーンはその週が始まるまでは、大丈夫かなと思っていましたが、最終的にはコンパクション24でスピード11が出て、なんとかなりましたけど……」(三谷氏)

ナショナルオープンで、10年前と大きく変わったのが、コースセッティングだ。これを目の当たりにしたのも、10年を経ての開催経験の賜物だったと思う。



メンテナンスを行うコース管理スタッフ

「当時のナショナルオープンと言えば、狭いフェアウェイとか深いラフというイメージ。ところが、今回のJGAのコースセッティングとはずいぶん違ったような気がしますね。一番驚きましたのが、フェアウェイをできるだけ広くしてください、ということでした。フェアウェイは高麗ですけど、ラフは野芝なんです。フェアウェイを広げるとことは野芝のところもフェアウェイにしなくてはいけないということ。今のフェアウェイと広げたフェアウェイを同じ水準でやるのには苦労しました。2020年は天候が良くなくて雨量は7月に600ミリ降った。8月は7ミリです。予定通りいかないもどかしさというか、大会前年のちょうどその季節に合わせて、これなら大丈夫だなという形作りもやっていたんですね。全くそれが、役に立たなかったというか、異常気象で最後のほうは慌てふためきました」(三谷氏)

セッティングの妙というか、よりゲーム性と技量が問われる試合展開にしたいというセッティングが施された。

フェアウェイの幅を広げることで、戦略ルートが増える。もちろん、行ってはいけないルートもある。その選択肢を狭めるのではなく広くとることで、技量や勇気が問われる。

深いアリソンバンカーが印象的な13番ホール



「フェアウェイを広くとるということで、どれだけアンダーパーが出てしまうのかという声も周囲から聞こえてきましたけど、実際、やってみると案外、あんな感じになってしまう驚きもありました」(池田氏)

鳴尾の名物は、とても面積が小さいグリーンとアンジュレーション。それを囲む深いバンカー。84個あるバンカーのほとんどが、グリーンまわりにあると言ってもいいほどだ。そのバンカーの淵まで刈り込むというセッティングもあった。

2020年は、残念ながらコロナ禍で一般非公開での試合となった。それでも、鳴尾の関係者たちは、それなりに安堵感と満足感があつたような気がする。

「もちろんプロアマ大会やイベントはできず、プロアマで色々な方を引っ張っていただければ入社したい人も出てくると思ったりはしていましたけど(笑)。元々シニアオープンの運営は理事と90人ぐらいの運営委員、全員が実行委員の予定で、そこに医療ボランティアが入って。当初は壮大な人数を予定していました」(光本氏)

フェアウェイの管理も入念に行われていた



歴史と伝統。独自の倶楽部ライフ、運営を100年守っている鳴尾ゴルフ倶楽部。そもそも、ナショナルオープンを100周年でやろうという決め手の一つは、知名度だった。

「実際、(大会中継局の)NHKが、中継の中で鳴尾のことを紹介してくれたので、非常に反響が大きかったですね。歴史を少し紹介していただいたりとかしましたし、あれを見てプレーしたいっていう人が増えて。私も知り合いの何人かから予約とって欲しいという電話があったりもしましたので(笑)」(光本氏)と言い、池田氏は「鳴尾は、日曜日はメンバーだけしかはいれない、プライベートクラブですから知名度も低いんですね。関西4クラブの中で、鳴尾はそんなに名前が売れてない。それが日本シニアオープンをやったことによって、NHKの放送もあり、名前が広がったというのはあります。10年以上前になりますかね。昔、調査したことがあって、関西での知名度はゴルファーの3%とかでした。関東とあまり変わらないんです。関東の人が、鳴尾を知っていて、関東のほうが上回るくらいではないかというデータでした。やはり今回知名度は、あがりましたね」と言った。

ナショナルオープンを鳴尾で開催することの意義について、光本氏のコメントが言い得ている。

「(ナショナルオープンは、)もちろん、観客の人たちも楽しんでもらいたいですけど、プレーヤーも楽しんでもらえるようなコースでないといけないと思いますね。技術があがる、道具が良くなることによって今の評価と、次の十年先に回られたプレーヤーの評価は違ってくると思う。そう考えると、この先ナショナルオープンに限らず鳴尾でトーナメントをやることに関しては、伝統を守っていくということを重視していますから、コースを長くするとかは絶対に考えられない。6,600ヤードほどのコースで、こういう人たちがこういうプレーをしてくれたんだよ、というのが大事だと思う」と語った。

優勝した寺西明選手が「鳴尾は100年の歴史がありながら、まだ進化している」とコメントした。それは、常に、前向きに伝統を守りながら挑戦心があることの証だろう。

「元々、鳴尾は一般社団法人ですから、経営母体がないわけですね。社員全員が倶楽部の経営者です。その社員の代表が理事会に集まりあってその下に10個の委員会がある。各委員会でいろんなものを出して理事会にあげていき、それが通ったものを実行していく形でやっております、それがそのまま(大会の)実行委員会になったんですね。理事でもある委員長と各委員会が8人ぐらいで構成されていて90人ぐらいいます。今回のシニアオープンでは例えばレストランですけども、その担当委員会が、取り仕切ってシェフと色々考える。チャンピオンズディナーとか。今回はなかったですけど、前回のときは競技委員会にも出てもらったり当日担当のない委員会の人にはボランティアでタイムキーパーやったり、ボードを持ったり色々してくれましたよ。そんなイメージでやっていたんですけど、元々そういう組織があって、実行委員会って名前をつけているんですけども、結局は普段の鳴尾でやっていることです」(池田氏)